



神戸市長田消防団第3分団副分団長 (被災当時)の体験談

「消防団員はすぐ集まれ!」、間髪を入れず助けを求める声。靴とヘルメットを取り出しに崩れた階下にもぐり込む。表に出たとたん次から次へ救助を求める声。家族よ許せ!

現場が増すばかりで人手が足りない。通りがかりの人に声をかけ応援を求め、分団員1人以上を付けて現場へ向かわせる。「道具が欲しい!」のこぎりだ。バールだ。ジャッキだ。現場を走り回り道具を渡し二次災害のないよう注意を促す。声をかけ反応のある現場を優先する。やっと1人目を救出。履物がない、近所のスリッパを借用。次々と救出される人を福祉センターへ送る指示。そして次へ。息をつく間がない。「深入りに気をつけろ!」と分団長からの伝言。頭でわかっていてもついのめり込んでしまう。1人でも多く助けねばと気持ちばかりが先行してしまう。

二次災害に気をつけねばと反省する。次から複数団員での行動が必要だ。担当地区内を巡回中、隣の兵庫区で生き埋めとの声。応援に駆け付けた甥を伴い現場へ急ぐ。退路を確保しながら前進せよと指示する。2階の屋根が胸の高さまで跡形もなく崩れている。瓦、トタン、柱、壁、手当たり次第左右に投げる。現場の一角に火の手が上る。「だれか119番は」「連絡済み」との声。「急げ!」救出現場の風上だ。炎が近づく。次々と消火器が集まるが効果がない。3mも離れていない作業者の肩に火の粉が舞う。「熱い!熱い!助けてくれ」胸に突きささる助けを求める声。風がうずまきだした。限界だ。「全員退避!」「退け!」「逃げてくれ!」しかし、だれも逃げようとしない。危ない。サイレンの音が近づく、消防車だ。助かった。が、消火栓が使えない。応援消防車の機関員を伴い地下水槽へ。やっと水が出る。しかし、通行車両にホースを破られる。機関員に減圧を依頼し近くに落ちていたタオルと自分のベルトでホースを作ろう。「よし!」増圧OK。近くにあった他の分団詰所にてハンドマイクとロープを借用、交通止めをする。が、制止の手を振り切り通り抜ける車両。身に危険を感じるも後へ引けない。やっと鎮火、応援の甥とともに詰所(分団詰所全壊のため分団長のガレージを詰所に設定)へ。もう15時30分過ぎか。やっと一服しながら尋ね人の対応に、次から次へ深夜まで続く。

外が暗くなり始めたころ、分団長指示により夜間パトロールを開始する。懐中電灯で映し出される光景は、この世のものではない。瓦礫と壊れた家の間でたき火で暖をとるグループが数力所以上、火の元に気をつけるよう注意をしながらパトロールを続ける。が、途中から道がない。いや、壊れた家が続き道路や路地が寸断されパトロールもままならない。あちこちにまだ生き埋め者が相当数いるであろうが、この状況では手のつけようがない。明るくなるのを待と

う。

夜明けと同時に町内の行方不明者の確認作業。並行して食料の確保だ。各分団員は自宅（全員が全壊）の中から食料になるものを持ち出し集める。菓は町内の薬局屋さんが無料にて提供してくれた。次は飲料水、近くに上水道の破損箇所があり漏水しているとの情報。分団員3名に容器を持たせ現場へ。

生き埋め現場へ再度近づくも我々では手のほどこしようもない。残念。そこへ消防車、救急車の侵入、道路確保のためパワーショベルカーが入ってきた。分団長の手配だ。次から次へやったことのない業務、消防団員としてまたはボランティアとして避難所の飲料水、トイレ用の下水、救援物資の配布、取引先のトラックを借用、そして夜警と行方不明者の調査と生存者の確認。尋ね人の照合、そしてまたまた火災発生。

何日ぶりかであった家族の顔、残念だが声が出ない。身ぶり手ぶりでのど菓を頼む。家族の心配げな顔。

1月25日ごろから本業再開するも1日4時間仕事して消防団若しくはボランティア業務を10時間ほど、他の分団員も本業を再開しはじめ、夜警人数が減少する。定員半数割れにて夜警と避難所の雑用に追われる。

1週間も過ぎたであろうか機動隊員と自衛隊員が到着。行方不明者の探索を引き継ぎ、やっとな息つく。分団員は疲労困憊だ。年長の分団員の顔色が黒ずんで見える。即1週間の団業務離脱を指示する。私自身昼夜にわたる団業務のためお風呂は2週間以上も縁がない。ましてや洗顔など水がもったいない。電灯は近所の土木業の方に自家発電を借用し詰所、避難所前広場を照明するが、近辺は暗闇、何とも不気味だ。深夜パトロールには自前の四駆車のサーチライトを点灯、ヘッドライトアップ、携帯電灯にて周辺を照明する。あわてて逃げる怪しげな人影「追うな！」残された現場の確認を優先する。

「火の気は大丈夫か？」火事場泥棒に神経を逆なでさせられるが、近隣住民の協力には頭が下がる。先ほどの土木業者の協力……、震災直後における道具類の無償貸出し、夜警の助っ人。そして、とどめは火災現場における重機（パワーショベル）を使用しての活躍。燃えさかる火災現場へ重機で突入し、火勢をショベルとキャタピラで崩し延焼を食い止めたのは最大の功績である。

ともあれ、延焼を食い止めたのは住民パワーの賜だ。自慢じゃないが我が分団員もよく頑張った。気がつけば今日はもう3月19日、今日で夜間パトロールも打ち上げで分団員と協力者を集め慰労を實行し、震災以来のよもやま話に花が咲く。ご苦労様でした。本当にご苦労様でした。これで消防団員としての1月17日が終わった。長いながーい1日であった。明日からまた復興を目指してのながーい1日が始まる。頑張れ消防団！そして頑張ろう神戸。

「1996年 阪神・淡路大震災誌」（公益財団法人日本消防協会発行）から一部転載